

亀山雲平

長野 哲

新しい年が明けたばかり、東天よりまばゆいばかりの五彩の光が輝き、白亜の姫路城を浮かび上げ、城下の街々が静かに明けて行くころ、姫山の東方、五軒邸では元気な男の子が生まれていた。時に文政五年一月二十日（一八二二）父百之、母頼家の間に生まれた二男恭吉、後の雲平である。

この年、播磨の国にとって、特筆すべき二件の学校の完成があった。

藩校「好古堂」の移転大拡張と、他方、家老・河合寸翁の創立した「仁寿山齋」の開校である。

この二学舎の建設に依り、雲平の学者への道が運命づけられたのであった。

兄剛毅は好古堂を卒業して、仁寿山齋へ進学し、雲平は好古堂で学ぶのである。

この兄弟の学問に対する情熱が、後に聖人雲平となる生涯に大きな影響を与えてゆくのである。

恭吉は、長じるにともない、名を改めていった。式毅、由之、美和、敬佐、源五右衛門、雲平、号では、曳庵、節宇、可行園、晩水軒、六蔵山人、と称した。

雲平十才のとき父百之が死んだ。悲しい、悲しい出来事であった。しかし母は賢婦であった。夫を亡くしたつらさを隠し健気にもかえって雲平たちに一層学問に励むように諭すのであった。

翌年、雲平は藩校好古堂に入り、藩儒・角田省三郎義方（号 楯園）について経史、詩文を学ぶこと数年、学力優秀につき、十八才にして好古堂の助教役になった。

この頃、松岡賢次（井上通泰、柳田國男、松岡映丘らの父）が入学して来て、雲平の門下生となり、雲平の教えを受けていた。松岡賢次は後に熊川舎の

教授となった人である。亀山雲平に賦した詩文も数多く残している。

亀山雲平二十二才のとき兄剛毅が急死した。雲平はこのとき、食事も喉を通らないほど、嘆き悲しむのであった。雲平、家を継ぎ、祿高百四十石、役職は長槍隊の隊長であった。この年雲平は藩主酒井雅楽頭忠宝にお目見得する。そして好古堂勤務精励につき金五兩と、今後も尚一層学問に精進するようにとの励ましのお言葉をいただき、身に余る光栄と感激に胸躍らせ、益々文章報国を固く心に誓うのであった。

この頃幕府は政策に行詰りを感じ、良き人材を養成し政治に新風を吹き込もうとしていた。全国諸藩に対し優秀な人材を送ることを奨励していた。姫路藩も亀山雲平を選び、江戸官学昌平齋に入学せしめ、藩主一斎に学ばせた。佐藤一斎は岩村藩家老の二男である。藩主の子が林家を継ぎ林述斎と称し、昌平齋を主宰していた。一斎は主筋に当たる、林述斎を助け、述斎亡き後も昌平齋の発展に生涯を尽した人である。

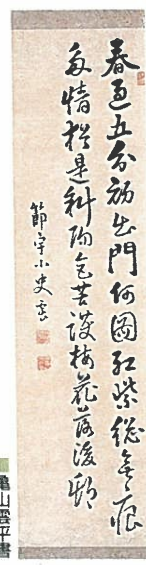
雲平はこの偉大な学者一斎につき、教育の神髄を学びとったのである。明治に入り国が治まって後、私立学校を設立して、学聖、君子、聖人、と人々から称される学者、教育者となった素地は、この昌平齋時代に培われたのであった。

同じ頃昌平齋に学んだ学友は、後日、内閣修史局長となった重野成斎、勤皇の志士・松本謙三郎、東大教授・堤静斎、同教授・南摩綱紀、岡鹿門、文学博士・三嶋中洲、帝室博物館総長・股野藍田、文部大臣・長三洲、これらの人々はみな「観海講堂」へ来て教えた。

江戸にあること十年余、ペリーの浦賀来航を初め国内外の大きな出来事を体験した雲平に藩主は大きな期待を寄せていた。雲平が姫路に帰るや直に好



亀山雲平「標註弘道館記述義」



亀山雲平書

亀山雲平（漢学者）

（かめやま うんぺい / 1822～1899）
好古堂に学び、江戸に游学。藩主酒井忠顕の就封に伴い好古堂教授となる。碩学の藩士として維新時には東奔西走し、藩に尽くした。維新後は姫路市白浜町の松原八幡宮祠官をつとめ、私塾「観海講堂」を興して子弟を薫陶した。各種漢籍の標註などを多数著している。

播磨三山

幕末から明治にかけて、姫路の地で博学と和漢の文才をもって広くその名を知られた学者に、亀山雲平、春山弟彦、庭山武正がある。奇しくも三人とも姓に「山」がつくことから、畏敬の念をも含めて、世に「播磨三山」とうたわれた。

古堂の教授に任命、当時千人を越える藩士の子弟の教育に専念せしめた。併せて大監察という特権を持つ役職にも任命し、乱れた藩論の統制に当らせるのであった。

明治に入り雲平は、青松白砂の景勝地松原村に私学「観海講堂」を創設し、昌平黌に学んだ教育を実践する。

雲平の教えの目標は、「国家一旦の用に立つ人材」の養成にあった。

そして雲平の教え子のなかから多くの有為の人材が続々と育っていった。

好古堂の門人は嘗つての姫路藩士の子弟である。門人には藩主、家老から足輕に至るまで各層に亘り広く、龜山雲平の八十年の生涯に姫路藩主は八人を数える。この内忠室、忠顕、忠績、忠悼、忠邦、この五人の藩主に仕えた。この五人藩主に学問の相手となり、進講をした、即ち侍講である。

この五人の藩主はみな聡明で学問好きの公子であったと、又、自分如き未熟な学者の話をよく機会あるごとに乞われ、論語の好きな殿、孫子の好きな殿、孟子、大学と各藩主により好みが変わったと書残されている。

観海講堂開校のことは

郵情を陳て祝文に換える

節宇龜山先生は博学の君子、神道の教專にして、松原縣社の神官なり、薰命四方に轟き、先生の高徳を聞きて入門を欲する者多し、然るに先生の寓は正しく社の後に在る。

其の室甚だ狭からずと雖も、多員の生徒を容れるに能わず、常に私塾の設の缺けたるを恨んで、是において舎長金井兄以下門人若干、之に加へ先生の善き交誼の者を合せて十余名、首唱して各々多少の資金を募り、塾舎の新築を謀る。然りと雖も其の費之亦頗る少なからざる故、首唱者東奔西走し廣く有志者の助成需む。遂に竣を得る、其の功先生の陰徳の致す所なり。

本日開塾の式に行く、先生予め自ら擇ばれし塾名は観海と号ぶ、此地後に山を負い、前面は海に面して松樹あり、竹林あり、市街を隔てること僅か歩くと粟生校隣りて警察分署に相對す、其位置恰も巴の字の如し、鼎の足に似る、即ち謂うに縣社之神章、巴に巴の紋を掲ぐるに合す、亦位置、形状神殿を隔て三区相對し、因らずも巴の紋の形に適う、恐らく是れは神靈の導く所歟。果然則ち此の塾舎の冥護を蒙るに仍り長替の不朽を知るべきなり。

明治十七年歲次
甲申十月初一日

置塩梅翁謹拜

観海講堂開業式祝文 答諸彦

明治ノ聖世ニ際シ、奎星ノ文運ニ會シ、苟モ神州ノ赤子タル者、葵菴日ニ傾キ孝鳥親ニ哺スルノ忱以テ煦育萬分ノ恩ニ報ゼザル可ケン哉、此レ有志諸君ノ其心ヲ誠実ニシ其盟ヲ金石ニシ此講堂ノ設アル所以ナリ、雲也一日ノ長ヲ以テ明リニ師儒ノ関ニ補シ此講堂ニ主タルヲ以テ何ヲ以テカ其盛意ニ答ヘンヤ、古聖謂ユル憤ヲ発シ食ヲ忘レ終日乾々ナル者以テ期ス可キノミ、果シテ然ラバ即チ諸君ト共ニ神聖ノ大道ニ由リ洙泗ノ正流ヲ斟ミ時ニ手ヲ文林ニ携ヘ或ハ筆ヲ詩壇ニ揮ヒ風流篤行彼此相濟ヒ長短相成シ以テ國家一旦ノ用ヲ待ツ、此レ乃チ此堂ノ設ケアル所以ニシテ、而シテ雲ノ以テ諸君ニ報ズル所モ亦此ニ外ナラザル也。此レ獨リ諸君ニ報ズルノミニ非ズ乃チ以テ國家萬分ノ恩ニ報ズル所ナリ、乃チ以テ神州赤子ノ分ヲ盡ス所ナリ、謹テ奉答ス。

明治十七年十月一日

辰 知 龜山雲平拜

尚この日の席に来賓の先生方からは多くの祝文漢詩が贈呈されている。

(ながのさとし／龜山雲平顕彰会会長)



春山弟彦「播磨地誌略」明治10年

庭山武正 (国学者)

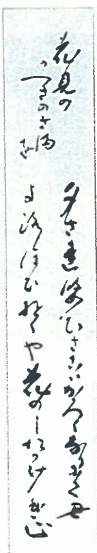
(にやま たけまさ / 1843-1918)
姫路市清水町生まれ。好古堂に学ぶ。明治3年に藩知事(旧藩主)酒井忠邦の侍講となった。姫路射楯兵主神社に奉仕し、社の来歴や播磨国風土記を研究した。古典の考証にたけ、多くの門人を得た。



雪中松 なかなかにかわかかへりぬるすかたして
としたつまつのいたたける雪 武正



けふの雪を花の姿によそほひて
かすみの衣はるたちにけり 武正



花見のかへさのさまを
夕されはひきこはかるくなりにも
よろはひゆくや花のしたかけ 武正

春山弟彦 (国学者、教育者)

(はるやま おとひこ / 1831-1899)
秋元安民の後任として好古堂の教授をつとめ、後年姫路中学校教師となった。博覧強記で、国語改良、国語教育に尽力した。博覧強記で、国学や歌道をはじめ、曆学、蘭学などにちよく通じた。